

東トルキスタン地方から古い文書が出て人に知られる様になつたのは千八百九十年頃からのことである、此後諸國の探検や土人の發掘などで漸々に世に出る様になつたが、しかし其文字といひ言葉といひともに今日では存在しないものが多いので其研究は中々容易なことではなかつたらしい、それで英吉利の Hoernle の如きは、此地方から出る文書經典等に見ゆる言葉を三様に分けて、第一をイランの言葉と關係あるもの、第二を原始チベット、第三を蒙古土耳其系の者として區別をした、Stein の Ancient Khotan などに見ゆる Prototibet の名も全く之に従がふたものであつた、しかし此斷定はすこぶる曖昧な者にすぎなかつたので、Müller 氏は Le Coq 氏などがツルファンから持つて歸たウイグル即ち古い土耳其の言葉でかいた Maitrisimit (Sieg, Siegling 兩氏の報告には Maitreyasamiti と讀んで居る、そうして Müller 氏が明らかに Maitreya-vyakarana であるといふて居るのを是認した)なる經の跋に印度の言葉からトカラの言葉に譯し、またトカラからトルコの語に譯したものであると記されたものを見出した、トカラの民族は Indo-skythen に屬するものである、そうして從來 Hoernle 氏などが原始チベットとして居た言葉は研究して見ると全く Indogermanen 系の言葉であるといふ所から、前にのべた佛典 Maitrisimit の跋に於て認むるトカラ語なるものは即ち之に相當するものとして茲に此名を付する様になつたのである、これから Leuman 氏なども此説に鑒がみて unarisch なる名を用ゐ、次で Sieg 及び Siegling 氏は更に此經を研究して千九百八年の同學會の報告に出し、トカラ語といふ Müller 氏の名を襲ひ、之が愈々 Indogermanen 系のもので殊に歐羅巴の方のものに酷似して居るといふことを論斷する様になつた、さて佛教と大關係のある月氏はどの民族に屬するかといふことは既に屢々論ぜられたことで、印度で書かれた唯一の印度史と云はれて居る Kalhana のカシ